

女子部

近藤元粹 閱正
近藤元晋 著
太田聿郎 校



中等女子作文教授術

大阪

敢進堂藏



中等女子作文教授術 卷三

近藤元粹 閱正
近藤元晋 著
太田聿郎 校

第三章 日用書類

一 出給みまぐり
 左りりぐ ○ 出給みまぐり
 ○ 紙色 ○ 紙色 ○ 紙色
 ○ 送致 ○ 送致 ○ 送致
 ○ 急ぐ出給みまぐり

一 運送會社へ運送する
 子
 らは荷物の何れ何れ

中等女子作文教授術 卷三 女子部 〇一

近藤元粹 著
太田聿郎 校



中等女子作文教授術

大坂

近藤元粹 著
太田聿郎 校

中等女子作文教授術 卷三



第三章 日用書類

近藤元粹 閱正
近藤元晋 著
太田聿郎 校

- 出給みまごりしりしり
- 紙色
- 送致
- 急ぐ

一通運念法へ運送しり
むん中
すやーしりしりしりしり
らけり何何何何何何何

③友縁 ○袴地 ○帯地 ○秩
 父縁 ○本縁 ○金巾 ○瑞酒
 ○南酒酒 ○出持せ下され
 度 ○只今 ○夕才迄 ○お便
 ○上等の品 ○利口のお酒 ○
 出序の書 ○左のおく入用
 付 ○右方通り出持来下
 されしと ○南世振の縁が
 ら

④ けふどは呼おとくしと ○

お替らばは様様とくはの
 らせの心もてくくぬ身
 ○なとつと ○お連なぐ
 ○踏系 ○ままぶけ雲津夜
 ○いまでも跡はあおと
 くらぐ ○けもれへは波下
 されしと ○重ふ何程 ○出
 更知やされしと ○代巻出
 かりしおぬらつと出聞せ
 下されしと ○代巻のふ連
 持せと

③ 異腹酒文のみ下
 考後 入りしとくは父
 者用の酒地入用のみす
 以方くとりませぬ日中
 出せしと下はまてしと
 染物も敷を夜方太次
 改形の目下失念とくは持
 来下とくしとひなかり

④ 出持お配と敷とみ中

けふの心もてくくぬ身
 されしと何れ風情は
 先礼出先下されしとみ酒
 まま出酒の及物に余程並
 腹をお便となとくしと
 出先元におけしとくは
 及出分ち下されしと夜
 出程の通り何程もせし
 出入手とくしと

⑤ 此玉素ねーなり○此
 みのやうぬりせり○若
 子も及も跡にあり○を法
 のとををくくんとども○
 折角のせりよーとども○
 作しゆりせ○此をよーり
 ひらぬ此撥りやされそ
 ○金ま何程性よ更にやひ
 ○條の此用よ切つて上
 り○代金の書きよ此拂
 下されそ○先方よ更

⑤ 同此の中
 先き進ての此角の此中
 系と母名此面創此系
 ちりり信こはまは及指
 の使にんまこを傳も元ふ
 おりしゆ此編りて此
 といぬ及及此使しきし
 ひまうそ用よ此撥り下
 され代金の性よ此あり

⑥ 二倍と一倍とあり○
 書便よかせり○
 教便よめり○
 作の此係りぬ此教をく
 や○此振子ぬりて夜○此
 はらんよ此入らせれり
 ○かちをさる書り存り○
 ちとく此遊りぬ此入来

⑥ 時作見画の文中
 重後の此と屋くおあは
 さは版此あるし下あは
 くら時分りる名作強く
 くらこころまじり此様
 編りぬ此振けし名取
 ちり度次りてるしあは

すちふりし。○出おん下さ
れし。○出見画の志す
まてしをすいし。○輕
少し。○いも。○けし。○
出お音出うむひまて。○
あやま出母沙法。○あま
らふ付一寸出為し。

⑦出消息とる子孫とね
し。○うれ是出ぬを
あまら。○其原出由し。

されし。○出深切し。○出
下され。○事あうし。
○いそがし。○まう。○死跡ま
母沙法。○よ。○いづき
肉素。○積る。○出後。○よ。○
く。○お。○ひ。○白。○お。
南出い。○ひ。○遊。○し。
初。○よ。○と。○か。○不。○乃
時作。○出。○大。○よ。○な。○
く。○先。○の。○出。○ま。○
り。○出。○の。○ま。

夢のし。○出。○心
あ。○思。○下。○し。
出。○ひ。○ま。
あ。○あ。
あ。○叔父。○初。○
出。○あ。○下。○ま。

⑦同ねの中

出。○の。○や。○ね。○日。○毎
く。○出。○上。○は。○は。○是。○を

こそ出母沙法。○よ。○
く。○出。○の。○は。○あ。
て。○出。○は。○は。
い。○け。○あ。○母。○ま。
く。○は。○あ。○心。○下。○は。
ま。○あ。○あ。○あ。○あ。
く。○出。○の。○あ。○何。○
ま。○あ。○あ。○あ。○あ。
く。○あ。○あ。○あ。○あ。

八関およびらへバ○出世
 第○出陸長あをばしん
 ○出老久の由り○出子鳥
 白○出退陸ぬされん心○
 出回おねむのら○おそそ
 あがてらて出候びやうら
 答○自由あるるまらとど
 ちあひりてやふら○いつづ
 きき用兼と出いともい
 月○けらけらあがら○

了まをまを
 八返習よのまを
 おあつら出候ひ。まを
 まあひりてやふら
 取つらとら今夜は
 白出返習出候び
 ぬ心いんあ代ま
 てま物よのまを
 いまいよあまを

まねまね○松魚まね○出
 いとも納下されん
 久々お出交納下ま
 ら○すづい出候候
 くまをね音

に四回おけらぬ
 納下まを
 きま
 し

九回返り下

九候乃通り○候下され
 通り○出あねえ
 ○いちまやと出い
 形り○出源切し候下され
 ○まがくく頂戴し

出紙りまを
 の通りまを
 まを
 まを

出多用乃出申○出候き
 出申○お整らせあう○出
 互に手むう人そゆく
 出せんよひり○何なる
 手むう人そめてさ
 取りてづく○出着候
 酒り○法標の酒
 ⑬日増し出候ん的心○
 一寸やうり○梅乃るな
 牡丹○芍薬○杜若○百
 金○菊○水仙○梅○咲そ

いさうくくさそ私さま
 て西程下され集り候
 手納ししは梅の末陽
 ありしは西標の酒
 上るあいらし
 ⑬花よあくる中
 いやくは梅の標増し
 出候しは梅の末陽
 ありしは西標の酒

めら油○園上を春と候
 ○庭の梅花○出まごは
 におあうりてうねく○
 めづらりかひんくも
 ○此今時をばう海と候そ
 ろひらう○ま枝○ま
 ○花らうながあえらうの
 多くと申○出花瓶と梅
 されとてうねくうね
 白

のまか今と候るは
 ろをさうしは
 露のうぬりしは
 はははははははははは
 ありはらうり
 ありはらうり
 ありはらうり
 ありはらうり

⑬回中

③ 今とけりるを此心とて○
 嘆みぐさる心とて○うも
 けき花○涙ふたると
 下され○めづらきとる
 ○赤きくぬしり○涙
 くまがくく○何れも面福
 のよと中跡一り○血原
 礼○しり○涙く血礼
 ちり○涙うぐうとる
 臭も血原を信く下さ
 づも

思ふ事のつらさを此花の
 とは血あつくせり花の
 うも涙ふたると
 花籠をさし結する春
 の赤きと涙めよひりま
 を内中跡一りくお見
 してちりるくはま
 血礼のつらさを信く下さ
 らぬこと

④ あら玉れ血赤き○血始
 乃血志う何○限りなき
 てく○何れも血下
 いらも血○血人
 る事と血原を信く下さ
 づも
 ○高き血原を信く下さ
 づも○血赤きとる
 けき血原を信く下さ
 づも○血赤きとる
 づも○血赤きとる
 づも○血赤きとる

④ 年始のみ中
 あら玉れ血赤き
 乃血志う何
 てく
 いらも血
 る事と血原を信く下さ
 づも
 ○高き血原を信く下さ
 づも○血赤きとる
 けき血原を信く下さ
 づも○血赤きとる
 づも○血赤きとる
 づも○血赤きとる

うゝこ○がそ

⑤新産れ血経閉として○
 とやくと血み下され○
 くお血ちやけけりてん
 ○幸と血幸ねあまげり○
 ぬちやうへ毎くと血危介
 よおあまづてく○お考ら
 らん血窓をまおひてく○
 て夜のみよそめおぢぢや
 うゝおぢをひく○ちとく

お入らせりちひひ○
 うゝまて○血幸ま下
 り○血窓のま○あつてん
 血窓ん乃ちまおぢぢ

⑥けやどん毎く血危介
 おあ○血幸の毒○おあ
 ら○乳もあふりおぢぢ
 やうなうゆ○南人幸抱
 つてく号らつて○乳母産
 のゝく○お夜の水おおと

何とておぢぢ

⑤同如の中

そやぬ血代のあてい
 とやくと血み下され
 うゝおぢぢ
 血窓のま
 まはままんくおてて
 けやどん毎く血危介

⑥乳母と備ひ入るま下

けほとら血多用の血中
 いらくと血を倍おあ
 とくおぢぢ
 昨日血は下とるは乳母
 産後にもたやうとて

中等科用 女子作文教授術 卷三

附

○起居類語

- 出襟短能 ○ 出母事 ○ 出はりん ○ 出勇ま
 - 出はらるる ○ 出息者 ○ まあやのひまを
 - 出仕健 ○ 出仕業 ○ 出万福 ○ 出法得 以上先方ノ無事
ト云フ片ニ用ウ
 - うげらるる ○ うげらるる ○ つらがるる ○
 - 母事 ○ 母事 ○ 母事 ○ 別後るる ○ 妻妾
- 以上自分ノ無事
ト云フ片ニ用ウ

○欣喜類語

一 下されしく ○ 逆引く
 てのこゆをいへ ○ 白積お
 ちしくゆゑ ○ 血債償り上
 ら ○ 最字お集りさるりり
 け使へ 血債下され ○ け
 者人の中関せりされしく

二 軟便とめてやうり ○
 端方とめてやうり ○ 雨
 とんがち ○ 何
 ままがの清きとてゆめを

夫より人かたしを ○
 ひとひのてきせりゆゑ終
 りありい ○ 風強く
 ○ はさう船をさうとてゆ
 ら ○ 斗らに長運留とておぬ
 ○ 何日頃よりいふ心
 横におとす ○ あく思お
 い ○ 用多果し ○
 赤くうのほ便し ○
 ○ いあくめづるおは後

二 旅中親里へ 書り
 ぬ上
 ねはるのちさかき
 ちかきおのちさかき
 ちかきおのちさかき
 ちかきおのちさかき

二 旅中親里へ 書り
 ぬ上
 ねはるのちさかき
 ちかきおのちさかき
 ちかきおのちさかき

音もさう海とよぶてあ
 やりよと日ほの深さあや
 居は船中し思ふ方の
 ちかきおのちさかき
 ちかきおのちさかき
 ちかきおのちさかき
 ちかきおのちさかき

目よりうけら

のりまひあてておそく

④ 田植のついで

④ 田植のついで
 ○ 田植のついでに
 うなぎのついでに
 田植のついでに
 いそがしく
 ○ 田植のついでに
 田植のついでに
 まるく
 ○ 田植のついでに
 田植のついでに

田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに

田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに

田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに

⑤ 田植のついで

⑤ 田植のついで
 ○ 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに

田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに
 田植のついでに

下されしく○若くは人
 しまで○何れもたいめん
 乃ち○よづら○はこ
 へん○あるか○こ
 くとん

七 若くは人
 一筆を○下り○

りま○は夜○昇る

○昇る○昇級ある

○全く○出費量れあは
 まる○は

出満と推○

ろび○軽の

○まづ○

○は

され○

され○

は

八 消息

○

○

○

中等三

下されたり
 いたの
 か
 のみ

七 官

され

念

は

積地

は

に

指

く

八 回

出

詠

蘭

女子部

〇六

○虫更納下されらるる
先の虫経候よりくく紙
巻○扇子巻巻○袴地巻
巻○鯉巻尾○松魚巻連

⑩ おとろしき人よりせられ
く○松尾虫引下され
れく虫形ひくく○青
さんぐらるる子とて殺し
○引丸も洋るうおすませ
○いちとやくく○とやくと

虫いとひ下され○重尾
つ連巻虫を付し殺し
○南巻福巻巻と巻くく虫
巻下せしりくく○虫守及
くお巻○虫心巻くのお品○
虫更申あしく虫巻くく
○高虫巻巻上虫丸くく
くく○巻巻るがらと巻く
くく虫更巻虫付く下され
くく○巻くく虫更乃虫
巻くくあしくくく

目録より虫更下され
くくく巻くくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

⑩ 四五の中
思ふ巻くくくくくく
み下巻くくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく
くくくくくくくく

中よやうもなぐ○涼く水
礼中よら○氏神まきくを滞
るうお滞○いと久おいと
ひ納り○五がくく頂戴
いーも○もやぐとおい
もひと形り○おさきまうけ
られ○素等あつらうまぐ
白くまおお新巻の程行ま
うら○先らるるおれわ
くくおれも○こら上○おれ
○あふかー

おまきうくお滞
くくお滞ひまきお刻の
お光へまお滞お滞
せお入ひまて又お滞切り
おいおひ下とえ滞
くくお滞お滞お滞
りくお滞お滞お滞
と痛入ひお滞お滞
万くお滞お滞お滞

① ぬりまうらうら○関およ
びらつら○お素人白○奥
白○おお月白○おお姫の
心○お新巻白○お帯あき
れらに○めでくくおら
○あつらおお年産あらせ
らおとぬり○おおお
の志まーまて○おおお
おおの兆とぬら○すらえ

お滞お滞お滞
お滞お滞お滞
お滞お滞お滞
お滞お滞お滞
お滞お滞お滞
お滞お滞お滞
お滞お滞お滞
お滞お滞お滞
お滞お滞お滞
お滞お滞お滞

まきまき ○まきまき ○まきまき ○まきまき
いぬまきまき ○まきまき ○まきまき
いぬまきまき ○まきまき ○まきまき

④ ぬまきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき

いぬまきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき

⑤ つまきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき

いぬまきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき

④ ぬまきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき

いぬまきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき

⑤ つまきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき
まきまき ○まきまき ○まきまき

うはちて拾ぐら心○血
 然傷の程血毒一とら○
 医業を切らるるき人の救
 2血へらせの心○終血
 血毒をく○血毒をれ血
 ○やちとみく血はたき
 ○者真○湯毒○攪濁○白
 極○線香○血毒をへ血倍
 へ下されとく○血毒を
 何時よりや○血毒を
 りて下り血○終血は

各症白染筆いあ
 血毒をせられ全
 終血毒をせらるる
 く血毒を拾けしは
 ひとらきく
 血力毒の程毒一
 血毒をせらるる
 終血毒をせらるる
 終血毒をせらるる

これ拾ぐら心○血
 毒の毒○血とゆらむも
 中血毒○血毒をへ血
 ○やちとみく血はたき
 ○者真○湯毒○攪濁○白
 極○線香○血毒をへ血倍
 へ下されとく○血毒を
 何時よりや○血毒を
 りて下り血○終血は

と血毒をせらるる
 終血毒をせらるる
 終血毒をせらるる
 終血毒をせらるる
 終血毒をせらるる
 終血毒をせらるる
 終血毒をせらるる
 終血毒をせらるる

くはるに下され ○おろし
 みあつてく ○おろし
 く ○それぐ 佛あへ 向く
 ○まづい 出れまて 下
 のうせ。

よはあーくは目通
 りたかーく
 ちーく目目実
 ーく
 ち

中等女子作文教授術卷四

附

○時令類語

春 ○けころんち 志のぎーくおあ ○日にさひま
 春色 おあ ○日に 暖き おあ ○日
 ーくまき ○日にさひま 赤 おあ ○あ
 たるおあ ○にさひま 作 ○まはあ
 やに ○解きにおあ ○解き 解き
 ーく ○解き 解き ○解き 解き
 き ○解き 解き ○解き 解き

夏 ○時分揃あしむとてしむる色 ○あはき

日にくまむらさき ○次第上階考僧

後日考むにあか ○これ神言もあかえは ○梅天

うりくま ○まてむのむらさき ○結

の介の考ま ○まぐさきいさる者 ○堪くまし考む

○きんぐらまぬる

秋 ○いほし考むあかきとてしむる ○あつ考む

いほし ○あつ考むあかき ○あつ考む

いほし ○あつ考むあかき ○あつ考む

げの風袂まぬる ○時分の風あらし

○あつ考むあかき

冬 ○次第上階考僧

○あつ考むあかき ○あつ考む

○あつ考むあかき ○あつ考む

○あつ考むあかき

科用... 卷四

中等女子用

明治十七年十月十日版權免許 同十八年三月廿日改題御屈

同十八年三月廿日製本改御屈 同年四月刻成出版 定價十二

著者

愛媛縣志族

近藤元晋

同縣下伊豫國湯原郡小唐人町丁目廿九番地

大阪府平民

湯上市兵衛

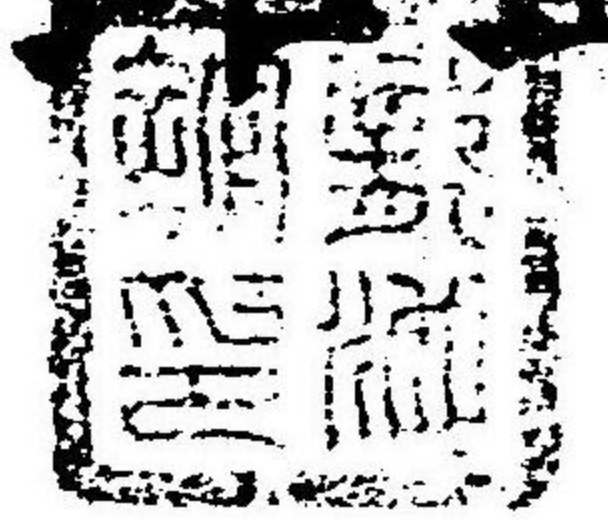


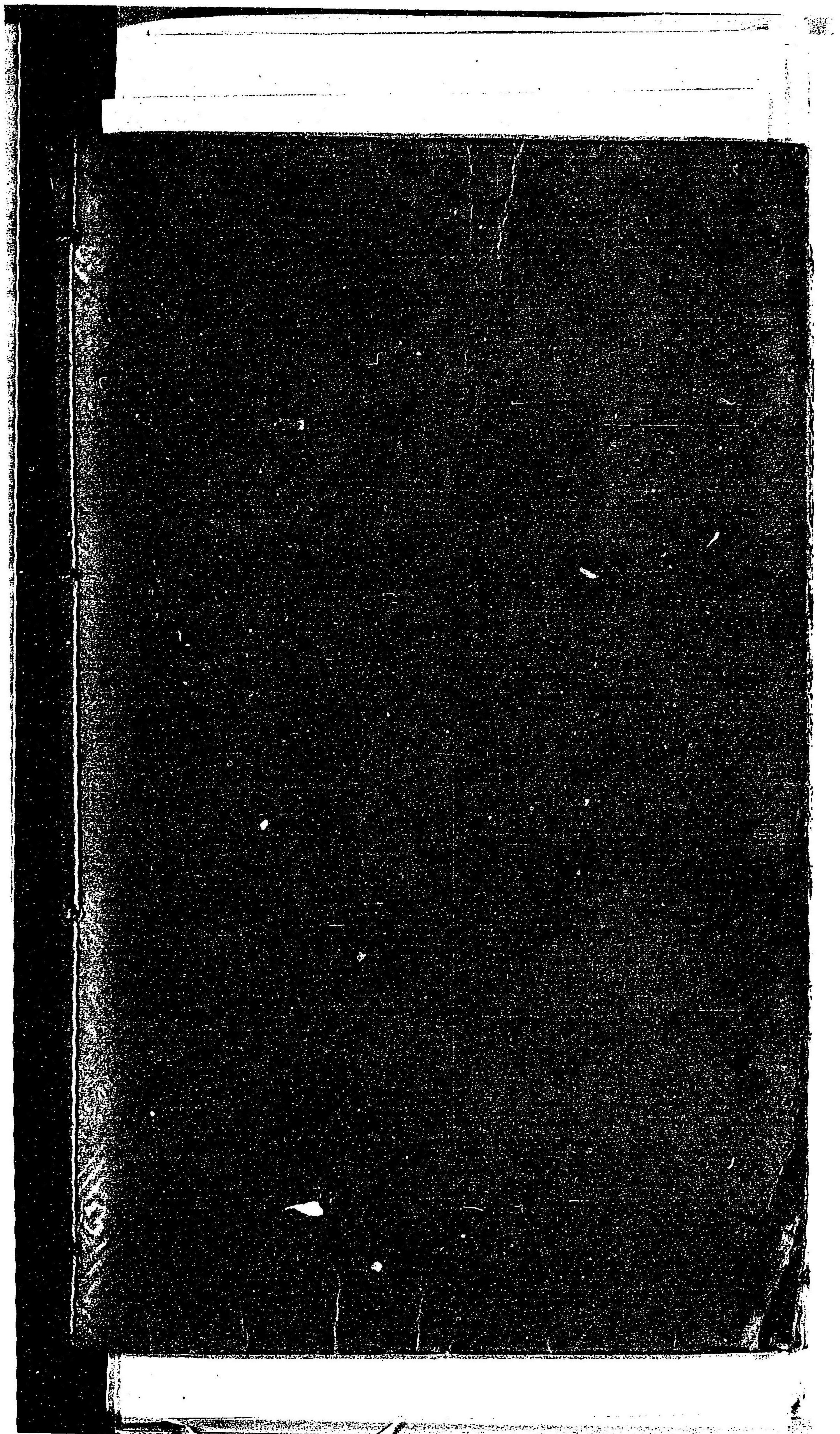
同府下南區順慶町丁目六拾番地

出版人

發兌所

敢進堂
龍池館





特33

553

中等

李作文教授術

大正七年
東京
大正七年
東京

四